グローバル共生　第３号

特集：いま、「女性」は どう生きるか

［論　文］

いま、「女性」はどう生きるか
―展示および本特集の背景と趣旨―

Rethinking Women's Lives from Our Past to the Future
Background and Purpose of the Featured Theme

小川早百合
Ogawa, Sayuri
聖心女子大学グローバル共生研究所客員研究員
女性展第1&2期プロジェクトリーダー

石井洋子
Ishii, Yoko
聖心女子大学グローバル共生研究所副所長
女性展第3&4期プロジェクトリーダー

現代の社会では，女性の生き方は多様化している。性の境界線が思った以上に曖昧なものであることが明らかになり，そもそも「女性」とは何なのかということ自体も問い返されるようになってきた。これまで私たちが当たり前だと思い，無意識のうちに強く定着している「女性をめぐる常識」は，これから先，どのように変化していくのか。またそうしたなかで，私たちはどう生きていくべきなのかという問いが，この数年来，本学の展示・ワークショップスペースであるBE＊hiveの展示企画者たちの間に浮上してきたのである。折しも，2019年に本学第１期生で国連難民高等弁務官を務めた緒方貞子さんが逝去し，世界的なリーダーであった彼女についても学生たちに紹介したいという思いもあった。

毎年，聖心女子大学で実施されている学生アンケートでは，社会的関心のあるテーマとして女性に関わるトピックが常に上位に上がっている。６割以上の学生がテレビやインターネット，就職活動や授業などで女性をめぐる話題に触れ，強い関心を持ったと答えていた。結婚と仕事，子育てと仕事，女性の社会的地位，女性の就労環境などをめぐる問題である[1]。

このような背景から，私たちは今回，女性の生き方を多角的に捉える展示を行いたいと考えるに至った。2021年５月から２年間にわたる２つの展示，「いま，『女性』はどう生きるか―キャリア，結婚，装い，命―」と「緒方貞子さんと聖心の教育」である。

本特集は，「いま，『女性』はどう生きるか」の展示内容に深く関わる研究論文を収録している。同展示は，２年間の展示期間を４期に分けて半年ごとにテーマを入れ替えた。まず，第Ⅰ期「自分に力を付けて社会を変えよう―女性のキャリアとライフコース」は，本学学生の意識調査の分析から見える女性の将来像を分析し，日本人女性のこれからを考え，社会に関心を持ち，当事者として切り拓く力が必要であるというメッセージを学生たちに送った。このテーマに関連し，本特集では「女子大学における人材育成の意義と可能性―女子大学における教育実践を通じて―」を寄稿した清泉女子大学の安齋徹先生が，企業勤務の経験を活かして，社会と繋がる女子大学での学び方について具体的事例を紹介している。

第Ⅱ期「『児童婚』は遠い国の話？―“結婚”から女性の地位について考える」は，日本女性の結婚とは異なる環境で結婚する女性たちに焦点をあて，世界の様々な結婚や近代日本の女性の結婚形態の具体例を紹介した。なぜ女性は結婚するのか，「児童婚」の問題点や解決方法までを考える内容となった。本特集の招待論文として，

1　ミッション推進会議資料『学生の社会的な問題への関心に関する調査』（2015～2022年）

展示資料を多く提供して下さった国際 NGO プラン・インターナショナルの池上清子理事長と山本大記プログラムオフィサーが，東アフリカのソマリランドで行われる女性性器切除の慣行に抗する団体の現地活動について報告している。当該社会の文化にどこまで関与できるか，悩みながら活動していると吐露した点は印象的である。また，オーストラリアに留学中で本学卒業生の高森かなえさんは，低開発地域の女性の学校教育を持続可能にするものとしての給食を取り上げている。本紀要では，若い人の論考も積極的に受け入れた。

第Ⅲ期「美か束縛か―纏足（てんそく）・コルセットの歴史と＃ KuToo 運動」は，「女らしさ」を求めるために，中国で行われてきた「纏足」の風習やヨーロッパのコルセットを取り上げ，美と「女性らしさ」の象徴について考える内容となった。実際の纏足の靴や貴重な中国服の展示品を貸して下さったグローバル共生研究所客員研究員（2021 ～ 2022）の謝黎（しゃれい）先生からは，纏足が中国社会で広まり，放棄されるまでの歴史的変遷を丁寧に綴った論考が寄せられている。同展示に関連する授業を受けた本学学生が，纏足について詳しく学ぶうちに女性抑圧の象徴という一辺倒の理解ではなく，複合的なイメージを獲得したという報告は喜ばしかった。

第Ⅳ期「世界から『命の誕生』を考える―ひとりひとりが選択できる社会」は，命そのもの，そして命の誕生のプロセスに目を向け，世界の妊娠・出産にまつわる違いについて紹介した。様々な違いがあっても，地球に生まれてくる命を育むために必要な支援やサポートの重要性について考える内容となった。寄稿した心理学者の神前裕子・中野博子先生，出産ジャーナリストで写真家の河合蘭さんは，展示や展示と連動した授業時に寄せられた学生の感想を丹念に読み込み，日本の大学における周産期教育がいかに大切かを主張した。

そのほか，スリランカ人女性たちの自立を支援する NGO「Gnadaa ナダァ[2]」の代表で，元日本外国特派員協会会長のスベンドリニ・カクチさんからの特別寄稿もある。彼女は Gnadaa の特別展示に加えて，SDGs を考える学生サークル「はなはな SDGs」のメンバーとシンポジウムを行い，低所得の女性たちが経済的に自立するための重要な収入源となる「ソーシャルファッション」という考え方を紹介した。「ファッションは流行ではなく自分のアイデンティティである」という言葉が印象に残った。以上，本特集はキャリア，結婚，装い，命という４つのキーワードを手がかりとして，「女性をめぐる常識」がいかに生み出されたのかという社会的背景や，女性をめぐる諸問題について国際比較や歴史的視座から読み解く女性展を深く理解する関連論考が集められた。

なお，女性展の目玉の一つとして，冒頭で触れた緒方貞子さんに関わる展示についても加筆しておきたい。東京倶楽部[3]の文化活動助成金を受けて実現した展示「緒方貞子さんと聖心の教育」では，難民支援という国際的な課題に対して，これまでにない理念と方法で解決に取り組んだ緒方さんが，何を見て，どのように考えて行動したのか。そうした緒方さんを育んだ草創期の聖心女子大学の教育のあり方とともに紐解いた。同時期に出版された緒方さんに関する書物やテレビ番組もまた，彼女の人道支援・救援活動の特徴は，現地の人々の話を丁寧に聞いて、現場の動静を把握した上で解決策をさぐる徹底した現場主義であったと紹介している。それは間違いないが，本展示で十分に描くことができなかったのは，政治学博士である緒方さんの分析力と実行力についてであった。実際，イラクのクルド人がトルコの国境閉鎖にあった時，イラク国内での避難民として多国籍キャンプによる保護を決断し，ブッシュ大統領の元に飛んで，米軍の協力を要請したと言われている。研究者としての深い知識が現場に活かされた具体例である。

以上，展示と本特集の概要を紹介した。女性を取り巻く状況は大きく変化し，女子大学のあり方も問われる昨今，あらためて女性の生き方を考える機会は貴重であったように思う。４つのテーマはそれぞれ，女性が直面する厳しい現実に触れる内容もあったが，展示室の入り口に配置したシンボルオブジェ，「優しくない，/ Unfriendly, 」（さとうりさ作）は「触れる展示」として，多くの来場者を楽しげに受け入れてくれたと思う。２年間にわたって女性を見つめたグローバル共生研究所の取り組みが，女性のみならず，日本社会の未来を照らすことを願ってやまない。

2　Gnadaaとは，タミル語で「歩く」を意味する。
3　東京倶楽部（一般社団法人）は，国際親善を目的として鹿鳴館の一室に拠点を置き，1884年に設立された会員制社交クラブである。